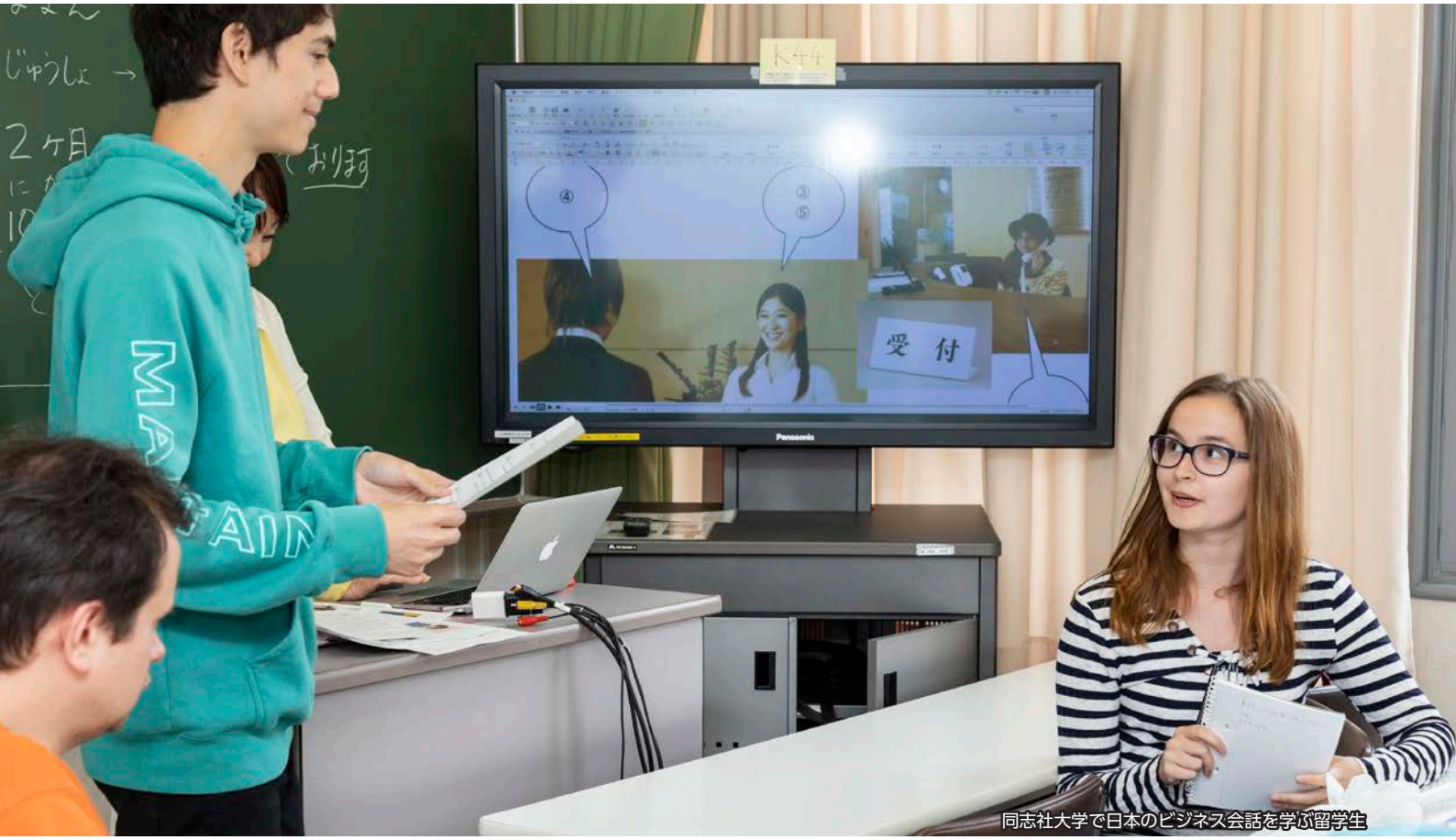
児童教育実践についての研究助成

研究紹介ファイル 2018

vol.6

日本語教育を考える

―日本語非母語話者・児の視点から見えてくるもの―



同志社大学で日本のビジネス会話を学ぶ留学生

私たちは、この助成によって生まれた「縁」を大切に、
過去の助成研究の中からいくつかの研究をピックアップし、
応募に至るまでの背景や問題意識、その後の発展や新たに生まれた課題、
さらには研究の社会的意義についてもレポートしてまいります。
これから応募を検討されている皆さまに、
当財団が助成してきた幅広い研究分野を知っていただくとともに、
独自の視点で研究に挑む信念や研究成果を生み出すことへの情熱、
専門家としての誇りなどを感じていただければと思います。

博報財団
HAKUHO FOUNDATION

これまでの研究紹介

★ 研究代表者の所属・役職は発行当時のものです。

2016.07.01 発行
vol.1 読み書き障害をかかえた子どもたち ―― 発達性ディスレクシア

- File No.1 原　惠子 氏（上智大学 大学院言語科学研究科 准教授）
- File No.2 奥村 智人 氏（大阪医科大学LDセンター 技術職員、オプトメトリスト）
- File No.3 三盃 亜美 氏（大阪教育大学 教育学部 特別支援教育講座 講師）
- File No.4 関 あゆみ 氏（北海道大学大学院 教育学研究院 准教授）

2016.10.01 発行
vol.2 読書を科学する

- File No.5 猪原 敬介 氏（日本学術振興会 特別研究員 PD）
- File No.6 常深 浩平 氏（いわき短期大学 幼児教育科 専任講師）

2017.07.01 発行
vol.3 進化する授業
― 子どもたちの思考を深め、理解力をはぐくむ授業とは ―

- File No.7 鈴木 一成 氏（東洋大学 文学部 教育学科 准教授）
- File No.8 寺本 貴啓 氏（國學院大學 人間開発学部 初等教育学科 准教授）

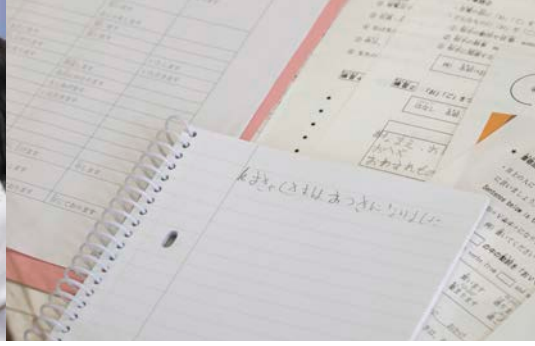
2017.10.01 発行
vol.4 まばたきで言葉をつむぐ、手話で想いを伝える
― コミュニケーション支援 ―

- File No.9 鳥居 一平 氏（愛知工業大学 情報科学部 情報科学科 教授）
- File No.10 武居　渡 氏（金沢大学 人間社会研究域 学校教育系 教授）

2018.07.01 発行
vol.5 “当事者” の思いに耳を傾ける
― 不安を解消し、健康的に過ごしていくための支援 ―

- File No.11 田部 絢子 氏（立命館大学 産業社会学部 准教授）
- File No.12 涌水 理恵 氏（筑波大学 医学医療系 保健医療学域 発達支援看護学 准教授）

「研究紹介ファイル」バックナンバーは、財団ホームページからもご覧いただけます。
https://www.hakuhofoundation.or.jp



日本語教育を考える —— はじめに

日本には、日本語を母語としない人たちが少なからず住んでいる。

海外から日本にやって来て働く人や留学生、

親に連れられ日本で暮らすようになった子どもたち。

大人も子どもも、彼らに共通しているのは、

海外にルーツを持ち母語が日本語ではない、ということだ。

日本に住む非母語話者・児にとって、日本語を学習する際にはどのような困難があるのだろうか。

たとえば東日本大震災の時、「高台（TAKADAI）」という日本語の意味が理解できず、

どう行動すればいいのかわからなかった留学生が大勢いたという。

あるいは海外にルーツを持つ子どもたち。

彼らの多くは日本の学校に通い日本語で書かれた教科書を使って日本語で授業を受ける。

当然、日本語を読み書き話し聞きとる力が必要だが、

そのための指導や支援体制はまだまだ十分とはいえない現状があるようだ。

特に母語の力が未熟な幼い時期に日本にやって来た子どもの場合は、

母語も日本語もあいまいなまま成長していくと大きな問題を抱えてしまう。

「ことばはアイデンティティと密接に結びついている」

以前この研究紹介ファイルでとりあげた研究者のことばだが、

日本語非母語話者・児が日本語の力を獲得するための困難さは、いく層にも絡まっているように思われる。

それを解きほぐす手立てのひとつが「母語と非母語」の関係性という視点ではないだろうか。

日本語学習者への支援につながる成果物を生み出した研究を紹介することで、

日本語を母語とする私たちが見落としている日本語の客観的な有りようと日本語教育について、

今回はじっくりと考えてみたい。

研究代表者
金（きむ）　愛蘭（えらん）氏　広島大学　大学院教育学研究科
日本語教育学講座　准教授

第３回　研究助成

外来語の基本語化の研究
― 20世紀後半の新聞コーパスをもとに ―

［助成期間］2008年４月～2009年３月

いかにして言葉で困る人たちを少なくするか言葉と社会をつなげていきたいですね

言語学者であり、日本語教育者である金さんが日本語の中の外来語（洋語）に注目したきっかけは「非母語話者として感じた違和感」だったという。

「大学院のマスターの時に韓国から日本に来ましたが、日本人と話したり新聞を読んだりする際に、どうしてこんなに外来語を使うのだろう、と不思議でした。実際に韓国人や中国人、英語圏の人たちも“え？こんな意味で使ってるの?!”と戸惑う事例がよくあり、日本語学習者は困っていたのです。たとえば日本人は『トラブル』を『お肌のトラブル』のように使いますが、英語母話者は日常会話においてはTroubleよりもProblemsなど別の単語をしばしば選択するようです。日本語の中で外来語はどういう意味を担い、どのように使われているのかを調査し理論化したいと思いました」。

その違和感を基に、すでに院生のころから「外来語の基本語化」というテーマに着手していたというが、金さんの研究のオリジナリティは外来語の中でも「抽象的な意味を表す外来語」に焦点を当てていることだ。

先行調査によって、20世紀後半には日本語における外来語の使用量が確実に増加し、その結果、一部の外来語が「基本語」＝広範囲・高頻度に使用される語彙群の中に見出されることが明らかになったという。さらに「基本語」になった外来語には、「テレビ」「ホテル」「ビル」「エンジン」など生活が近代化し「モノ」が普及することで使われるようになった具体的な名詞のほかに、「タイプ」「システム」「バランス」「ケース」「トラブル」のような「抽象的な意味を表す外来語」が入っていることもわかったそうだ。

具体名詞の場合は、もともと外国語だった言葉が「モノ」と一緒に日本に入って来て生活に溶け込み「外来語」と呼ばれる日本語の語種のひとつとなり定着したと考えられ、日常的に使われる理由もわかる、と金さんは言う。

「けれども、『トラブル』の場合は『もめごと』『不仲』『不調』『事故』『不祥事』など、以前から使われてきた和語や漢語があるにもかかわらず、なぜ基本語に進出してきたのか。この現象は日本語の骨組みを成す言葉が大きく変化していることを示唆していますが、その実態の解明は、当時、十分なされていませんでした」。

分析したいのにコーパスがない コーパス作成が研究の大きな転換に

そこで金さんは「抽象的な外来語の基本語化」について、①どんな外来語が基本語に進出しているかの特定 ②どのような過程を経て基本語になっていったのかの検証 ③なぜそういうことが起ったのか、をつまびらかにすることを目的に、まず大規模な20世紀後半の「通時的新聞コーパス」を作成するところから助成研究に着手した。

コーパス化する資料媒体に新聞を選んだ理由は、

「公共性が高く一般読者に伝わるように書かねばならない媒体において外来語の使われ方を見ることは、外来語の浸透度合いを測るバロメータのひとつになると考えたからです。社会・経済面から学芸欄、読者ページなど内容や話題も多様性に富んでいます。さらに均質な資料の中で、20世紀後半の通時的な変化を見ることができる点も大きな理由です」。

実は金さんは助成研究に取り組む以前に、新聞媒体を資料に「トラブル」と「ケース」の２語については基本語化の過程を明らかにしていた。が、分析に使える「通時的新聞コーパス」がその頃は存在せず、

「図書館の書庫に閉じこもって、新聞の縮刷版を読みながらひたすら用例を探していました。用例を見つけたらコピーして英単語帳に切り貼りし、それを自分でパソコンに打ち込んでデータ量が蓄積できたら分析する。遅々とした歩みで時間も相当かかりましたね」。

しかし、「抽象的な外来語の基本語化」を実証しその実態を解明するには、もっとたくさんの外来語について調査し分析しなければならない。そのためにも「大規模で通時的な新聞コーパス」の作成は金さんにとって不可欠だったのだ。

「『外来語の基本語化の研究』をしたかったのですが、そのためには自分でコーパスを作るところから始めねばならなかったのです」。

金さんは1950年から2000年までの『毎日新聞』を資料媒体に、10年おきに各年平均約200万字、全体で1000万字を超える「通時的新聞コーパス」を設計・作成した。これほど規模の大きなコーパスは日本ではきわめて珍しく大いに注目され、金さんの研究そのものの大きな転換点になったという。

「助成により入力業務を任せられることで、調査と分析に時間をまわすことができ、結果を共同研究者と共有もできる、そのおかげで研究がさらに進み発展していきました。本当に大きな成果でした」。

外来語が基本語化している理由は新聞記事の文体の変化にある

作成した「通時的新聞コーパス」を使って金さんはまず、使用の度合いが増加傾向にある外来語と減少傾向にある外来語を分析・抽出して5段階に区分した【表1】。さらに意味の側面からも検討して、増加傾向の大きい区分ほど抽象的な意味を持つ外来語が多く、逆に具体的なモノを示す外来語は少ないことを実証したうえで、基本語化したと考えられる外来語の候補【表1のうち太字】を示した。この結果は「外来語には具体名詞が多い」というそれまでの常識をくつがえすものだった。

また「抽象的な意味の外来語が基本語化した」と言うためには、外来語の増加傾向に応じて既存の類義語（和語・漢語）の使用量が減少している事も確かめなければならない。

そこで候補のうち最上位にある「メンバー」と「レベル」の2語については、それぞれの類義語の使用量の変化を通時的に明らかにし「職員」や「一員」が「メンバー」に、「段階」や「水準」が「レベル」に取って代わられるという基本語化の過程の型を発見した。そして外来語の基本語化が生じた理由を、20世紀後半の新聞の文章

【表1】区分1（増加）（増加傾向係数＋15～＋8：+12から+8は略）

係数	外　来　語
15	**メンバー**、**レベル**、**データ**、**イメージ**、**ソフト**、**タイプ**、リーダー、トイレ、ノート、**コピー**、**スペース**、**ハード**、ベビー、スポンサー
14	**ボランテイア**、**デジタル**、&、**コミュニケーション**、**アドバイス**、フォーラム、ストア、グランプリ、バイク、イラスト、**エリア**、**ガイドライン**、**クレーム**、ワゴン、**ドリーム**、オゾン、**シフト**
13	**センター**、**トップ**、**サービス**、**システム**、**ホーム**、**ポイント**、**テーマ**、**ビジネス**、イスラム、ネット、ページ、**ポスト**、**ベスト**、**トラブル**、**アンケート**、ビデオ、シンポジウム、ライバル、**キャンペーン**、ドラマ、**コメント**、セミナー、アレルギー、レストラン、たばこ、タイムズ、サン、グラフ、ヘリ、**リーダーシップ**、**ビッグ**、**チャーター**、**メーン**、ワード、パーク、プラザ、カレンダー、プルトニウム、**プロセス**、**クリア**、ゴールデン

区分5（減少）（増加傾向係数－8～－15：－8は略）

-9	パーセント、ライン、UP、マン、パン、ライト、オーバー、ジェット、ダイヤ、コンディション、ジャーナリズム、ストライキ、オペラ、キック、ズボン、ミシン、セメント、インテリ
-11	スト、ベース、スポークスマン、クリスマス、ピッチ、アカデミー、コン、ナイロン、アジ、プラウ、フラン、ホープ
-13	トン、FW、バック、プール、スローガン、ピストル、デー、セント、テン
-15	ポンド

基礎知識

（金さんに教えてもらいました）「コーパス」ってなんですか？

Q.「コーパス」とはどんなものですか？

A. ひとことで言うと、電子化された大量の言語資料です。パソコンで処理できるテキストの集積で、日本語の場合は「日本語コーパス」と言い、書き言葉のコーパスもあれば、話し言葉のコーパスもあります。「話し言葉コーパス」には音声データもあります。資料媒体によって「新聞コーパス」「書籍コーパス」「Yahoo!ブログコーパス」「Yahoo!知恵袋コーパス」「白書コーパス」「国会会議録コーパス」「教科書コーパス」など種類も豊富です。

※参考：国立国語研究所　KOTONOHA
「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言
http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/

Q.「コーパス」はどのように作るのですか？

A.「書き言葉コーパス」は書籍や雑誌、新聞や各種専門文書などからサンプル頁を抜き出し人の手で文字入力するのが基本です。検索機能などを付加し、例えば「トラブル」と検索語を入力すると「トラブル」という言葉を含む前後の文章が表示されます。媒体ごとの比較もできるので「トラブル」という言葉が小説ではどう使われ、新聞ではどう使われているか、といった傾向や違いを見ることもできます。マスターの留学生が「先生、『うざい』は知恵袋に多かったです」と言っていましたが、確かに「白書コーパス」に「うざい」は無いでしょうね（笑）。

Q.「コーパス」はいつ頃からあるものなのですか？

A. 単語自体は15世紀ごろからあるとされていますが、現在の意味で使われるようになったのは20世紀半ばになってから。まだ50年程度です。
「コーパス」は1964年のBrown Corpusを始まりとして、言語能力よりも言語運用の解明を目指す「コーパス言語学」を発展させますが、その構築や利用は、非英語圏でのノンネイティブによる英語研究や英語教育に用いられたことによっても盛んになりました。日本でも1980年代後半から「英語のコーパス」が利用され始め、2011年には国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』が構築されて、ようやく本格的な「日本語のコーパス言語学」がスタートしました。「コーパス」の活用はまだまだこれからの分野です。

Q.「コーパス」は私たちの身近な生活にどう関わっていますか？

A. 国語教育に役立つ語彙や漢字（教育漢字）の教育現場への提供や、常用漢字の改定といった国語政策の基礎データとしての利活用などが挙げられます。また辞書編纂の際には、その言葉がどういう意味で使われているか、どういう意味や用法を載せればいいかという客観的な資料になります。日本語学習者が困るのは、辞書で「トラブル」をひいたら「不祥事」と書いてあり、「不祥事」をひいたら「トラブル」と説明してあるような場合です。こういうトートロジー（堂々めぐり）をコーパスの活用でなくすことができます。

が次第に概略的な文体へと変化したことが大きくかかわっている可能性があるのではと結論づけた。

「戦後の新聞を見るとまるでタブロイド紙のようです。述べ方が具体的で庶民的な感じすらします。『トラブル』は私が作った『20世紀後半の通時的新聞コーパス』でも1950年には使用数はゼロです。60年～70年に少し増え、80年からグーッと使用頻度が伸びていきます。そして20世紀後半には『金銭関係にトラブルを抱えていた』のような述べ方の型ができていて、トラブルの具体的な中身を書かなくても何か問題があったことがふんわりと伝わる便利な言葉として新聞記事を書く際に重宝がられるようになります。『けんか』『いざこざ』『故障』『事態』etc.いろんな意味を一言で述べられる外来語が基本語化していったのは、新聞記事の文体が概略的な述べ方へと変化していったことと密接に関わっていると言えると思います」。

さらに金さんは、次のような面白い話を聞かせてくれた。

「類義語との競り合いに負けて、結局、基本語の座は獲得できず、“挫折”した外来語もあります。たとえば『クレーム』。1950年や60年には全く使われていないのに、1980年にかけて急激にグッと使用頻度が高まりますが、10年後には落ちてしまい現在でも『苦情』という類義語を上回ることはできていません。新聞ではもともと経済面で使われ始めた言葉が次第に経済とは関係のない事柄でも多用されるようになるのですが、『クレーマー』のようにちょっと良くない感情を連想させる意味がついてきたために使用頻度が落ちたのでは、と推測しています。日本では苦情や文句を言うことは社会の中であまり評価されないですよね。社会心理学や社会学など異なるアプローチをしないと要因の解明はできませんが、言葉は生き物です。取って代わったり挫折したり、そういう現象がなぜ起きているのかを調査し他言語と比べることで、日本語の特徴がさらに浮き彫りになっていくと思っています」。

コーパスは、教育の場でどのように活用できるのか

「通時的新聞コーパス」はその後も少しずつ規模を大きくし、現在は2000万字の膨大な資料になっているという。助成研究から10年、金さんの研究はどう発展しているのだろう。

まず、子どもたちの教育にコーパスがどう活用されているのかについてうかがってみた。

「日本語が母語でない児童生徒への日本語習得指導や支援に、教育現場ではすでにかなり使われています。『学習者コーパス』というものがあり、日本語を習う学習者たちの日本語（ノートとか作文、レポートや論文など）を集めて、それをコーパス化し中身をいろいろ見ていくと、例えば中国人はこういう間違いをよくする、韓国人はこんな間違いが多い、といった分析ができるので指導・支援に役立てられるのです。また『教科書コーパス』を使えば算数の教科書によく出てくる言葉、物理の教科書でよく使われる言葉がわかり、その意味を用例と一緒に学ばせることができます。さらにたとえば『シャワー』という言葉は動詞の『浴びる』と一緒に使うことが多いといったように、ある言葉とくっついて使われる表現を調べて提示することもできるので、言葉を使いこなす力が身につくのです」。

指導・支援だけでなく、子どもたちの自主学習の促進にもコーパスは大いに役立っているという。

「本や雑誌を読んでいて気になる言葉があった時に、自分でコーパスを用いて検索してみれば、文章の中での言葉の使われ方がわかります。同じ言葉でも使われ方によって意味が異なることもわかり、言葉の用例を習得していくことができます」。

また、常用漢字の選定といった「国語政策」にもコーパスが力を発揮する。

「コーパスを用いて使用頻度の高い漢字を抽出・リスト化した基礎資料を国に提供することができます。2010年に新常用漢字が発表され『鬱』という漢字が常用になって話題を呼びましたね。あれは『書ける』より『読める』が新しい常用漢字選別のコンセプトのひとつだったからです。『鬱』はなかなか書けない漢字ですが、コーパスを用いて調べてみると、書き言葉においては『鬱』という漢字表記の使用頻度が高いことが実証されました。手では書けないけれど読む機会は多い漢字だとわかったのです」。

日本語教育の現場でも、国語教育の現場でも、「コーパス」の教育的活用はまだまだ可能性を秘めているようだ。

「助成研究では『基本外来語のリスト』を作成し、現場の教師に提供しましたが、さらに教科書に載っている外来語に絞ったリ

《深刻・決定的な危機的事態に至る可能性を持って顕在化した不正常な事態》

【ヒトとヒトとのトラブル】	〔デキゴトのトラブル〕 • 例：R容疑者が1週間前にホテルで、従業員とトラブルを起こし「火をつける」と騒いだことがあり… • 類義語：もめごと、悶着、けんか、争い、いさかい、衝突、騒擾　等
	〔関係のトラブル〕 • 例：Mさんは交友関係でトラブルを抱えていたとみられることから、… • 類義語：もめごと、いざこざ、ごたごた、もつれ、不和、不仲、葛藤　等
【モノのトラブル】	〔機械のトラブル〕 • 例：42秒後、第1段ロケットにトラブルが起き、打ち上げは失敗。 • 類義語・故障、不調、不具合　等
	〔身体のトラブル〕 • 例：春先はにきびなど肌のトラブルが起きやすい季節。 • 類義語：不調、悩み、疾患、（肩の）故障　等
【モノゴトのトラブル】	〔運営・運用のトラブル〕 • 例：今月から導入された介護保険で、全国の現場で生じたトラブルについて… • 類義語:障害、支障、混乱　等
	〔事故・事件のトラブル〕 • 例：新幹線の新大阪駅ホームから乗客が線路内に降りるトラブルがあり、上下7本が10～13分遅れた。 • 類義語：事故、（緊急）事態、事件、不祥事　等

共通の抽象的な意味。新聞にとっては報道する機会のきわめて多い《事態》。

【参照1】現在の「トラブル」の意味用法

ストを提供することもできます。教育現場では外来語を中身まで丁寧に見ることは時間的制約もあり難しいようですが、ずっと例に挙げている『トラブル』もそうですが、基本語化した外来語は、もはや日本語なのです。『日本語』として日常的に使われるようになった外来語がどのような意味を担いどういう使われ方をしているか、日本人もよく整理できていないのではないでしょうか」。【参照1】

いろんな人の幸せにつながる事を言葉の研究を通じて提示したい

大規模な「通時的新聞コーパス」を自ら作成し、「抽象的な意味を持つ外来語の基本語化」現象について、どういう外来語が基本語化したかという語彙論的アプローチを膨大な実例を示しながら丁寧に実証した金さんだが、現在、文体と絡めての文章論的アプローチもさらなる展開をみせているそうだ。

「戦後間もない1950年の新聞と今の新聞を比べると、明らかに述べ方が違うのです。その違いがなぜ起こったのかを見ていくには近代から調査しなければならないと思い、共同研究者とともに近現代まで範囲を広げました。明治時代の雑誌コーパスを使って述べ方を見てみると、近代は漢語優勢な時期なのです。それが今では外来語優勢の時期になっているわけですが、それは日本語の文体と日本語の構造がどういうふうに変わってきているからなのか、より大きなパラダイムで捉えたいと考えています」。

金さんによれば漢語は分析的に述べるのに適しており、外来語は総合的・概略的に述べるのに適しているという。

「どういうふうに述べるための外来語になってきているのか、実例を積み上げているところです」。

また、金さんは福祉言語学（Welfare Linguistics）の研究活動も行っており、日本語非母語話者のための災害時・通院時に必要なマニュアルを作成し、それを留学生や日本語学校などに無料配布しているという。【参照2】

「東日本大震災の後、東北大学で危機言語を調査するプロジェクトがあり、その時に『高台』という言葉を知らない、習ったことがない留学生が多かったと聞きました。『避難所』もよくわからなかったようです。災害という特定の分野においては大事な基本語ですが、整理して理解できるようにしておかないと命にかかわります。病院に行った場合もそうです。保険証とか診察券という言葉も習いませんし、そういう文化がなければ余計わかりません。日本人が外国に行った場合を想像するとわかるのではないでしょうか」。

福祉言語学はここ10年くらい活発になってきているそうで、

「実は私自身、阪神淡路大震災の時に初めて日本にやってきたので、2度の震災経験は貴重だと思っています」。

最後に、金さんの今後のビジョンについてうかがってみた。

「外来語の基本語化については、さらに社会学的なアプローチ、たとえば年齢差による意味用法・使用頻度の違いを見ていくことも必要だと思っています。いろいろと目の前のことでいっぱいな気もしますが、コーパスを活用しながら、言葉の研究でできることで社会に何かを提供していきたいですし、日本人も外国人も、いろんな人の幸せにつながるようなことができればいいな、と。言葉で困る人をいかに少なくするか、それが言語学研究者の使命のひとつなのではないかと思っています」。

【参照2】大地震の対応マニュアル〔やさしい日本語版〕

▶ 日本語教育学を学ぶゼミ生・留学生と。「言葉そのものにときめいて、燃えてほしいですね。新しくて面白い現象を見つけた時のワクワク感を大事にしながら、言葉の研究がどういうふうに人を結びつけていくか、絆を作っていくかを意識して、言葉で社会を見る、社会から言葉を見る、そんなふうに言葉の中身を見られるようになってほしいと思います。」

研究代表者
櫻井（さくらい） 千穂（ちほ）氏
同志社大学
日本語・日本文化教育センター　准教授

第４回　研究助成

外国人児童生徒の日本語読解力育成に向けた基礎的研究

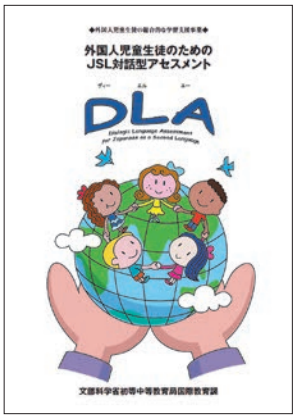
［助成期間］2009年４月～2010年３月

めざすのは外国にルーツをもつ子どもたちの全人的発達 真に有益な支援方法を模索していきたい

読者の皆さんは、バイリンガル教育と聞いてどんなイメージを思い浮かべるだろう。日本語と英語が完璧に使いこなせるようになるための言語教育、というふうに捉えている人が多いかもしれない。が、

「本来は、言語的マイノリティの子どもたち（日本の場合は日本語を母語としない子どもなど）が健やかな成長を遂げるためには、どのような教育環境を提供していけばいいのか、彼らの言語はもちろん、全人的に発達させていこうという考え方なのです。二言語環境の中で育つ彼らの言語の力を両方とも失わせないことが彼らの全人的発達につながるという立場で、多角的な指導・支援方法を探求している分野です」。

日本では現在でも定着しているとは言い難いバイリンガル教育本来の考え方を基軸に、助成研究で「外国人児童生徒の日本語読解力育成」を目的とした基礎調査に取り組んだ櫻井さん。この調査結果はその後、共同研究者とともに開発した『対話型読書力評価』（2012年）へと発展し、さらに文部科学省が日本語指導を必要とする児童生徒の言語能力を把握するために開発・発行した『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』（以下DLA）へつながっていると櫻井さんは言う。



▶『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント　DLA』（文部科学省：2014年）

JSL: Japanese as a Second Language
DLA: Dialogic（対話型）Language（言語）Assessment（アセスメント）

「文科省の『日本語能力測定方法の開発』事業に推進委員として関わり、DLAの『読む』の領域を担当しました。同じ内容・やり方で日本語と母語、二言語の『話す・読む・書く・聴く』力を測定することができます。助成研究で収集した外国ルーツの子どもたちの読解力の実態を現す言語データは本当に貴重でした」。

2014（平成26）年には外国人児童生徒に対する日本語教育をより充実させるために「特別の教科課程」（必要な日本語の指導を、在籍学級の教育課程の一部の時間に替えて、在籍学級以外の教室で行う教育の形態）の編成と実施が制度として位置づけられた。外国にルーツをもつ子どもたちへの日本語指導・教科学習指導の体制はある程度整ったかに見えるが、

「まだまだ手探り状態で支援にあたっている現場がほとんど」だと櫻井さんは言う。

民間団体の最近の調査によれば、外国人が多く住んでいる地域の公立小学校では特別支援学級（特支学級）に通う外国人児童の割合が日本人児童の倍以上になっているという報告もある。特支学級が、日本語ができないがゆえに発達的な困難を抱えてしまった子どもたちの受け皿になっている可能性が示唆されており、その原因には支援体制や個々の児童に適した指導が十分とは言えない現状が指摘されているようだ。

現在、櫻井さんは日本語指導に関わる教職員への研修やワークショップなどを通じてDLAの普及と活用に向けた活動を意欲的に行っている。もちろん、これまでにも現場と連携して外国ルーツの子どもたちに対するさまざまな実践的提案を行ってきた。助成研究当時、日本語支援を必要とする子どもたちの教育環境に、櫻井さんはどんな課題を見ていたのだろうか。

外国にルーツをもつ子どもの二言語能力の実態を明らかにする

研究者になる前のことだが、南米スペイン語圏をルーツとする子どもたちのサポートに携わった経験のある櫻井さんは、学齢期に来日した彼らが、日本の学校教育環境の中で抱えざるを得ない多様な困難を目の当たりにしたという。また自身がフィールドとする関西圏の公立小中学校の現場の声として、日本で生まれた外国ルーツの子どもたちの学力の伸び悩みが取りざたされている現状を肌で感じていたともいう。先行研究では、学齢期の子どもの教科学習言語能力を高めるための基礎力は読解力＝読みの力だと明らかにされており、外国ルーツの子どもたちの読解力の発達段階を見ることができる評価ツールを探したが、彼らの言語能力を二言語両方とも包括的に測定できるアセスメントが当時の日本にはなかった。

すでに海外のバイリンガル教育分野における研究では、母語の力が不十分な子どもの場合は第二言語の力も低迷してしまうという研究結果が世界各地で報告されていたそうだ。また学齢期途中で移民した１世の

【表1】学年相応レベルの読解力が身についていると判断された児童の割合

学年	低		中		高		全体	
	NSC	NSJ	NSC	NSJ	NSC	NSJ	NSC	NSJ
N	21	31	22	29	20	32	63	92
読書力有 (*n*)	1	17	4	12	3	16	8	45
割合 (%)	4.8	54.8	18.2	41.3	15.0	50.0	12.7	48.9

子どもだけでなく、現地で生まれた2世の子どもとネイティブの子どもとの読解力にかなりの差が生じていると指摘する調査結果もあったという。

「日常会話レベルの日本語はさほど問題がないのに、学習面でつまづいている外国ルーツの子どもたちに有益な指導方法を構築するためには、彼らの言語能力を母語も含めて包括的に評価することが必須です。が、それ以前に、評価の前提となる基礎調査、特に学習の基礎と言われている読みの力の実態調査は当時ほとんど手がつけられていない状況だったのです」。

日本で生まれ育っているのに日本語読解力が弱いのはなぜ？

そこで櫻井さんは①外国人児童生徒の読解力の実態を解明する ②その実態を読書環境・言語環境との関連の中で考察する ③母語と日本語の二言語の関わりを分析し指導に対する具体的提言を行う、の3点を目的として、まず、日本生まれの中国語母語児童（NSC:Native Speaker of Chinese）63名を対象に、彼らの日本語読解力調査を実施した。また①と②に関しては調査結果を客観的に考察するため、日本語母語児童（NSJ:Native Speaker of Japanese）92名にも同様の調査を実施した。NSCは全児童、NSJは学年の読解力レベルを代表するよう配慮し、クラス担任が選出した。

読解力評価には、英語と日本語の二言語で独自のバイリンガル教育を実践している学校で開発されたアセスメントを援用した。このツールは英語圏で実績を持つ多読プログラム用アセスメントを参考に開発されたもので、子どもとテスターが1対1で行うインタビュー方式である点が特徴だ。子どもに年齢相応のテキストを何冊か示して選ばせ、音読か黙読が終わったらテキストの理解度を測るため「このお話を初めて聞く人にわかるようにお話ししてください」と指示してあらすじ再生（retelling）を促し、終了したらその子の再生内容に応じた質問をしたり物語の解釈をたずねたりする。この間のやりとりをすべて録音して発話データを収集し、さらに文字化して評価を行った結果が【表1】だ。

協力を得たNSCとNSJは同じ学区内にある公立の小学校に通っている。同じように日本で生まれ、同じ地域に住み、同じ地域の幼稚園や保育園に通い、同じような学校教育を受けているにもかかわらず、NSCとNSJの結果に表のような差が生じたのは、どういう環境要因があるからなのか。インタビュー調査では子どもたちの読書習慣や家庭での言語環境についても質問して回答を得ており、それらの質的な結果をもとに櫻井さんは次のように考察した。

〈読書環境について〉

- NSCのうち中国語の本が読める児童はひとりもおらず、多数のNSCが家庭に中国語の本が一冊もないと回答した。
- NSCは低学年では本が好きな児童が多いが、学年が上がるにつれ読書が好きでなくなる児童が増える傾向があった。
- 低学年のNSJの多くは親による読み聞かせの経験があり、幼稚園・保育園のうちに絵本を読めるようになっていたが、NSCは日本語でも中国語でも読み聞かせの経験はほとんどなく、一人で読む児童がほとんどだった。

〈読書の質について〉

- 本を「よく読む」と答えたNSCが何を読んでいるかの中身を見てみると、幼稚園のときにもらった絵本・マンガやゲームの本（3年生）、絵本や低学年レベルの物語（4年生）、学校の教科書、といった回答があり、年齢相応の読書の質とは言えないケースがあった。

考察　学年が上がるにつれてNSCの読書離れの悪循環が示唆された。また学年相応の読解力を身につけるためには読書の量だけでなく質のコントロールが重要なこともわかった。

〈言語環境について〉

- NSCは全員が日本生まれで日本語が強い言語であり、日常会話レベルでの日本語は流暢である。
- NSCの保護者は全員、中国語が強い言語であり、日常生活の中でほとんど中国語か、日本語と中国語を混在して使用している。
- NSCが家庭で保護者と話すときは①中国語のみを使う ②中国語と日本語の両方を使う・中国語を使うよう努力する ③日本語のみを使う、の3つのグループに分かれた。
- ①と②のグループのうち家庭で保護者とよく話すと言ったNSCのほうが、話さない子どもに比べて読解力評価の結果が学年相応レベルの児童が多かった。

考察　NSCにとっては弱い言語＝中国語であっても、内容の豊かなコミュニケーション環境があれば読解力伸長に有益である可能性がある。

また、NSJは就学前にひらがなの読み書きを習得しているのに対し、NSCは小学校に入ってからひらがなを覚えた子どもが多いこともわかったそうだ。

「この結果から、たとえ日本で生まれ育っていても家庭では中国語、学校では日本語という二言語環境の中で生育しているNSCに対しては、日本語を母語とする子どもとは異なった指導方法が必要だということが示唆されたと思います」。

さらに先行研究によれば、日本生まれや幼少期来日の外国ルーツ児で、第一言語が現地語に入れ替わった場合には母語をほとんど失ってしまうケースも多く、両言語とも伸び悩む傾向があるという。そうなると親

▶ 講演会で日本語支援に関わる教員・支援者を対象に話す櫻井さん。演題は『文化言語の多様な児童生徒の言葉の力をどう捉え、どう育てるのか～外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLAを通して～』。（主催：滋賀県教育委員会）

▶ 大学では、留学生を対象に日本語と日本の文化を教えている。
学生はビジネス会話で丁寧語と謙譲語について学んでいた。

子のコミュニケーションも質的・量的に下がり、結果としてアイデンティティの確立にもマイナスの影響があるとされているそうだ。

「母語を失ってしまうと、成長に伴って親から与えられる知識なども得ることができなくなってしまい、子どもの発達にとっては非常に大きな損失です。見かたによってはふたつの言語と文化という豊潤な背景を持っているにも関わらず、彼らの言語的・文化的土壌は、NSJに比べて育ちにくく痩せやすい環境にあることが浮き彫りになりました」。

子どもの談話、自然発生的な言語データから明らかになるもの

日本で生まれ育っていても、外国ルーツの子どもたちが日本語読解力の獲得に困難を示している現状を示した櫻井さんだが、助成後、研究の方向性をバイリンガル児童生徒の「二言語の読書力」に絞り、日本の学校環境の中で彼らを指導していく際の指針となる読書力の発達段階指標を提示することをテーマの中心に据えた。助成研究の大きな成果は、「読書力」=「読み手が文化的道具である本の意味内容に関わる力」を包括的に「予測」できる【資料1】のような自然発生的な言語データを大量に収集できたことだという。

助成研究ではNSC、NSJだけでなく、日本国内の複数の小中学校に在籍するスペイン語母語児童生徒（Native Speaker of Spanish : NSS）52名の二言語データも収集し、これらの分析から得られた知見がDLAにもつながっているそうだ。

「いろんな要素が絡み合って発せられるその子の言語の実態をそのまま談話レベルで収集したかったのです。ふたつの言語の状況がその子の中でどう絡み合っているのかを多角的に見ていくことで、ひとり一人に合った具体的な支援の方法＝何をどちらの言語でどのように学習させ指導していくかが提示できるようになります」。

たとえば小学校低学年にあらすじ再生をさせると、NSJの場合は同じ内容を繰り返しながらでも、なんとかひとりで最初から最後まで話すことができるそうだ。しかし、【資料1】の小学1年生のNSCのあらすじ再生データを見てみると、テスターの助けを借りないと完結させることができない状況であることがわかる。

「この子は『郵便箱（ポスト）』や『ゴミ捨て場』という語彙が出てこないので、日本語の語彙力をつけるのも指導のひとつだと考えられます。が、日本語の語彙を増やせば誰でもあらすじ再生ができるようになるわけではないのです。日常会話レベルでは問題がなくても、あらすじ再生が発達段階の途中で、まったくできない子もいます。『何してたかな？』『家作った』『誰が家作ったの？』『お父さん』というふうに一問一答でしか再生ができない子がいるのです。お話の内容はわかっているのです。聞けば答えられます。でも一問一答の型でしか話せない。こういうタイプの子は語彙力が足りないから再生ができないのではなく、お話を時系列でとらえ、段落構成して話すという言語行為そのものが発達途中にあるのです。NSC、NSSの1年生のほとんどがこのタイプでした。こういう子は、もうひとつの言語でも一問一答でしか答えられません。談話レベルのデータからはその子の認知面を含む発達の段階まで見えてくるのです」。

助成研究の考察結果「NSCにとっては弱い言語であっても、内容の豊かなコミュニケーション環境があれば読解力伸長に有益である可能性がある」という結果についても、家庭での言語活動の質と量がその子の認知的発達を促した可能性は十分にあり、実際、その子どもはインタビュー調査中の受け答えの語彙が豊富で想像力や発想力が豊かな印象が見取れたという。

NSJにしても最初からあらすじ再生ができるわけではなく、家庭で母親などと「今日は保育園で何して遊んだの？」「えっとね…」というような言語活動をたくさん積み

【資料1】就学前レベルのテキスト（絵本）を読んでC判定を得たNSC107のあらすじ再生の一部

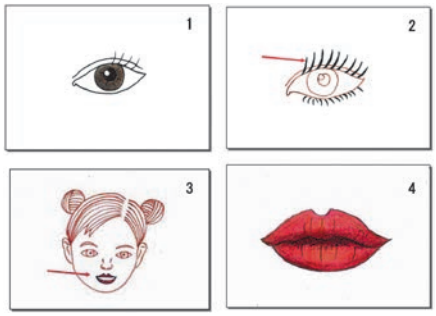
040NSC107：	んーとー。（うん）［5］ねずみたちがー（うん）、ゆうび［2］んのー、（うん）やつを探してた。
041T：	探してた。うん。ねずみたちって誰、誰だろう。
042NSC107：	んと、坊やたち。
043T：	うん、坊や／だけ？たちって誰と誰
044NSC107：	ほんでー、（うん）坊やのとう／おとうさんとー、おかあさん。
045T：	うん、坊やとー、お父さんと、お母さん。ねずみたちやなー？うん。探してたやんなー。はい。それからどうなった？探してて。
046NSC107：	んでー、入ってー、（うん）ほんで、何にもないからゴミ拾いのところに行ってー、（うん）／／拾ってきた。
047T：	え、どこに入ってみたの？
048NSC107：	［2］んと、
049T：	どこに入ってみたんやろ。
050NSC107：	んーと、郵便の、ところ。
051T：	そうやな、入ってみて何にもないからー、それから？
052NSC107：	ゴミ拾いのところに（うん）いって、（てー）うんと、［2］これ拾いに来た。｛＊表紙の絵を指差して｝
053T：	うん、こんなん拾いに行った。うん。［10］うん、それから？拾いに行ってー、これ拾いに行ってー、どうしたんだろう、その後。
054NSC107：	家をかたづける。
055T：	家をかたづけた。うん。それでー？それからどうなったー？
056NSC107：	片づけた後ー、（うん）ご飯を××。
057T：	ご飯を何？
058NSCI07：	［3］
059T：	どうしたんやろ、ご飯を？どうしてた？ご飯を。
060NSCI07：	食べた。
061T：	あー食べてたなー。誰と食べてた？
062NSCI07：	んーねずみたちのみんな。

040～062は発話番号、「T」はテスター、「NSC107」は児童番号を表す。［　］の数字は沈黙の秒数、／は一秒に満たない区切り、（　）はあいづちを示す。

重ねてきた結果なのだと櫻井さんは言う。

「要は会話も読書も接触の量と質がNSJに比べて少ない（低い）のです。DLAを使えば具体的にその子の言語環境がどのようであるかを二言語ともに測定することができるのです」。

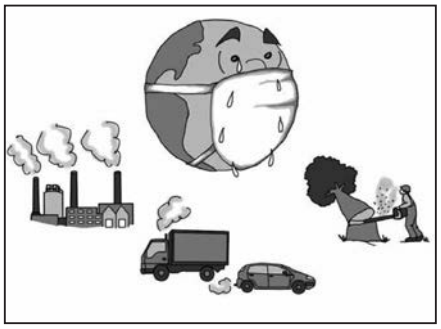
DLA は子どもには学びの機会になり教師には気づきの機会になる



【参照1】DLA〈はじめの一歩〉語彙カード

実際にDLAを使う際は、最初に「語彙カード」を見せて答えさせるが【参照1】、「ひとつの語彙を知らないことはそれほど問題ではありません。子どもの回答や様子を観察しながらその子の言語環境を予測するためのアセスメントなのです。目は知っているがまつ毛は知らない、口は知っているが唇は知らない、ということは高頻度語彙は知っていても低頻度語彙は知らないのではないか、といった言語レベルを推測できるのです。そこから、どういう言語環境を与えればよいのか、その子に合った本を選んで一緒に繰り返し読むなどの指導計画へと結びつけることができます。

また『話す』の領域では【参照2】のようなカードを見せて何を表しているかを口頭で説明させるのですが、たとえば、母語で"大気汚染""地球温暖化"の概念を獲得していて説明できる子は、滞日期間が短く日本語の語彙や文法の習得が不十分であっても、拙い日本語でその概念をなんとか説明しようとします。一方で、日本語の日常会話が流暢でも、この絵が表す概念が理解できず"木を切っている""車がある"と個々の絵の説明だけをする子や、"（地球がマスクをしているのは）インフルエンザが流行っているから"などと答える子もいます。そういう子どもは母語でも同じようなことを答えます（もしくは、母語をほとんど失っていて何も答えられないこともあります）。DLAは、このように言語の力だけでなく、認知面の力、教科学習の知識も見て指導につなげようとしているのです」。



【参照2】DLA〈話す〉認知カード「環境問題」

【表2】6-7歳（小学1年生）の読書力の発達段階（読書力ステップ試案）（櫻井さんの下記著書から抜粋）

	6－7歳（～小学校1年生終了時）
ステージ6	□興味のある簡単なまとまりのある本や文章（ストーリー展開のある挿絵付きの短い物語や、身の回りのテーマの短い説明文など（小学校1年生国語下の教科書の物語や副読本レベル）を進んで手に取って、読む習慣がある
	□大事な内容を順序に沿って理解し、最後までつなげて詳しく話すことができる □好きな場面について、理由を挙げて詳しく話すことができる
	□文や意味のまとまりで区切りながら、ややゆっくりでも安定した速さで音読できる（一分間に200拍程度が目安）
	□挿絵から話の流れを結末まで推測することができる □わからないことばがあっても、前後の文脈から大まかな意味をとらえることができる □わからないことばの意味を自分から質問することができる □テキストの内容と自分の体験とを結びつけて考えることができる □読み間違いに自分で気づいて訂正できる
	□文章中に出てくる小学1年生レベルの漢字がだいたい読める □日常的な語彙（例：小学1年生向けけの文章にでてくる語彙）の意味を前後の文脈をてがかりにだいたい理解できる
	□母語で経験したこととテキストの内容とを関連付けられる

「まずは多読指導です。教科学習言語能力を伸ばすためには読書力育成に焦点を絞った多読が必須です。DLAでその子の読書力レベルや傾向を把握し、レベルにあった本をたくさん読ませます。読書への動機づけとしては本が読める時間や空間の確保も大事です。母語のほうになりますが中国ルーツの子どもたちのために中国語の本を置くスペースも作って母語保持と母語伸長に効果を出した例もあります。また、スクラップブック風の読書日誌を作ったり、読書マラソンの際に子どもが喜ぶシールを貼ったりといった実践も効果的でした」。

実際にDLAを使った現場の教師からの反響は「それまで気づかなかった、気づけなかったその子の一面に気づくことができた」という声が多いという。

アセスメントの語源はラテン語のassidēreで「横に座る」という意味だそうだ。DLAを実施する際、教師はその子ができたことを認め、褒め、「読めた」という達成感ややる気を引き出すのが何よりの教育的効果だという。

「子どもを信じることかな、と思います。認めてあげないと何も始まらない」。

かつて櫻井さんが所属していた研究グループがかかわった日本生まれのNSCの低学年女児Aは、

「1年生の時は日本語でも中国語でも十分に読むことができませんでした。日本語に対しては心理的距離もあったのですが、YouTubeの動画を見ながら中国語の文字を自然に習得していったのです。それがきっかけで、中国語の読む力が先に伸び、あとを追うように日本語の読む力も伸びていきました」。

やがて小5の時には中国語でも日本語でも年齢相応の読み物でかなり質の高いあらすじ再生ができるようになり「私は中国人やから中国語ができるのは当たり前やし、ここは日本やから日本語ができるのが当たり前」と言ったという。彼女は現在高校生となり「あなたは日本人？　中国人？」との問いに「私は人間」と答えたそうだ。

今後は読書力発達段階のステージ6～1【表2】をさらに精査し、もっと詳細な能力を測定できるようにしたい、子どもに読ませるテキストの量も増やし多様にしたいと展望を語る櫻井さんは、一貫してその子を中心にその子のいる環境を見るよう心掛けてきた。

「多くのことを子どもたちから学ばせてもらいました。本当に感謝しています」。

▶『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』（櫻井千穂著　大阪大学出版会　2018年2月）は、櫻井さんのこれまでの研究の集大成といえる。

当研究助成への応募について

「児童教育実践についての研究助成」は2005年に「博報『ことばと文化・教育』研究助成」としてスタートして以来、多様な研究を助成してきました。これからも、ことばの教育と実践の研究を支援し、教育の質の向上につなげてまいります。皆さまからのご応募をお待ちしております。

【対象となる研究】

●「ことばの教育」に関する研究

○国語・日本語教育の諸分野における研究

○あらゆる学びの場におけることばの教育に関する研究

●児童教育実践の質を向上させる研究

○多様な場における教育実践の質を向上させる研究

【応募資格】

下記のいずれかに該当する方を対象とします。

●日本の大学・研究機関に所属する研究者

※若手支援のため、教授やそれに相当する職は除く。

●日本の学校・教育委員会に所属する教育実践に携わる方

【助成金額】

1件につき300万円を限度に助成します。

【助成期間】

応募の翌年4月1日～翌々年3月31日の1年間

助成期間終了後、研究（代表）者が希望する場合は、継続助成の申請をすることができます。

※今後の研究計画書と提出された「研究成果報告書」を審査して採否を決定します。

● 詳しくは財団ホームページをご覧ください ●

https://www.hakuhofoundation.or.jp

博報財団
HAKUHO FOUNDATION

博報財団（正式名称：公益財団法人　博報児童教育振興会）は、
次代を担う子どもたちの豊かな人間性の育成のために、児童教育の実践者を顕彰する「博報賞」をはじめ、
「児童教育実践についての研究助成」「国際日本研究フェローシップ」「世界の子ども日本語ネットワーク推進」
「博報財団こども研究所」など、「ことば」「文化」の領域を中心に児童教育の支援につながる活動を行っています。
2018年度にはこれらに加え、新たに「博報教職育成奨学金」を設立しました。

公益財団法人 博報児童教育振興会
〒107-0052 東京都港区赤坂2-11-7 ATT新館8F　Tel 03-5570-5008 Fax 03-5570-5016
www.hakuhofoundation.or.jp　博報財団　検索

「研究紹介ファイル」は財団ホームページからもご覧いただけます。

© 公益財団法人 博報児童教育振興会

2018. 10. 01